

第8回『呼吸と循環』賞一受賞論文発表

菅 泰彦論文(呼吸器領域)と能勢直弘論文(循環器領域)が受賞

『呼吸と循環』誌では1年間に掲載された論文を対象に、『呼吸と循環』賞(Respiration and Circulation Award)を設置しております。本賞は当該年度の『呼吸と循環』誌(1~12号)に掲載された投稿論文(綜説は除く)の中からオリジナリティのある論文を選考対象とし、原則として呼吸器領域1編、循環器領域1編に賞状と副賞10万円を授与致します。今回、2015年(63巻)に掲載された投稿論文が対象となり編集委員による厳正な審査のもと2編の受賞が決まりました。以下に、受賞論文と受賞者、授賞理由を発表します。

【論文名】「レジオネラ肺炎11例の臨床像の検討：呼吸困難を訴えない急性呼吸不全は早期診断の指標となる？」(研究論文)

【著者名】菅 泰彦、浦野順平、寒川貴文、牧尾健史、原 彩子、三好啓治、高田哲男、原 聡志、木下善詞、細井慶太、関 庚輝(市立伊丹病院呼吸器内科)

【掲載号】63巻7号：689-695頁

【授賞理由】レジオネラ肺炎の発症は、温泉・循環式浴槽における菌の増殖、その吸入が典型的パターンと教科書に記載されているが、実臨床ではそれ以外のパターンのことのほうが多い。曝露環境の聴取は臨床では重要であるが、それだけに捕らわれると診断の誤りが生じる可能性も高い。レジオネラ肺炎は未診断のままで重症化した場合には、致死率が高い肺炎として知られている。受賞論文は、レジオネラ肺炎早期診断のための臨床的指標を後方視的に検討している。著者らは、救急外来で使用されているRicoの支援スコアを参考にして、レジオネラ肺炎の臨床病態の特徴を探っている。その結果、呼吸不全を呈しているにもかかわらず呼吸苦を訴えなかった場合、発熱を伴う肺炎で頻呼吸・低酸素血症にもかかわらず軽度の意識障害を呈した場合には、レジオネラ肺炎を疑うべきとしている。本論文は、日常臨床のpit



●菅 泰彦氏



●能勢直弘氏

fallを指摘した『呼吸と循環』賞に相応しい研究であると評価された。

【論文名】「待機的冠動脈造影を受けた患者における睡眠呼吸障害のスクリーニング」(研究論文)

【著者名】能勢直弘、金澤京子、草野久美、徳永佳代、草宮千春、別所文彦、中川優子(新行橋病院呼吸器外科、他)

【掲載号】63巻1号：94-97頁

【授賞理由】睡眠呼吸障害は各種循環器疾患のリスク因子である。診断治療の介入が推奨されているが、自覚症状に乏しく発見されていない患者が多い。待機的冠動脈造影は一般的に入院にて行われることが多い。受賞論文は待機的冠動脈造影を行った患者を対象として睡眠呼吸障害の簡易型睡眠ポリグラフで無呼吸低呼吸指数(AHI)を測定し、虚血性心疾患患者における睡眠呼吸障害の合併頻度、重症度を明らかにしたものである。その結果、冠動脈造影を必要とした症例では一般人口に比してAHIが有意に高く、経皮的冠動脈形成術の既往、Body Mass Index 25以上の症例でその頻度がより高いことを明らかにした。本論文により、待機的冠動脈造影により入院する際に睡眠呼吸障害の簡易検査を実施することは、虚血性心疾患患者の睡眠呼吸障害を効率よく発見できる可能性を示したものであり、『呼吸と循環』賞に相応しい論文であると評価された。